

信濃地名考 下

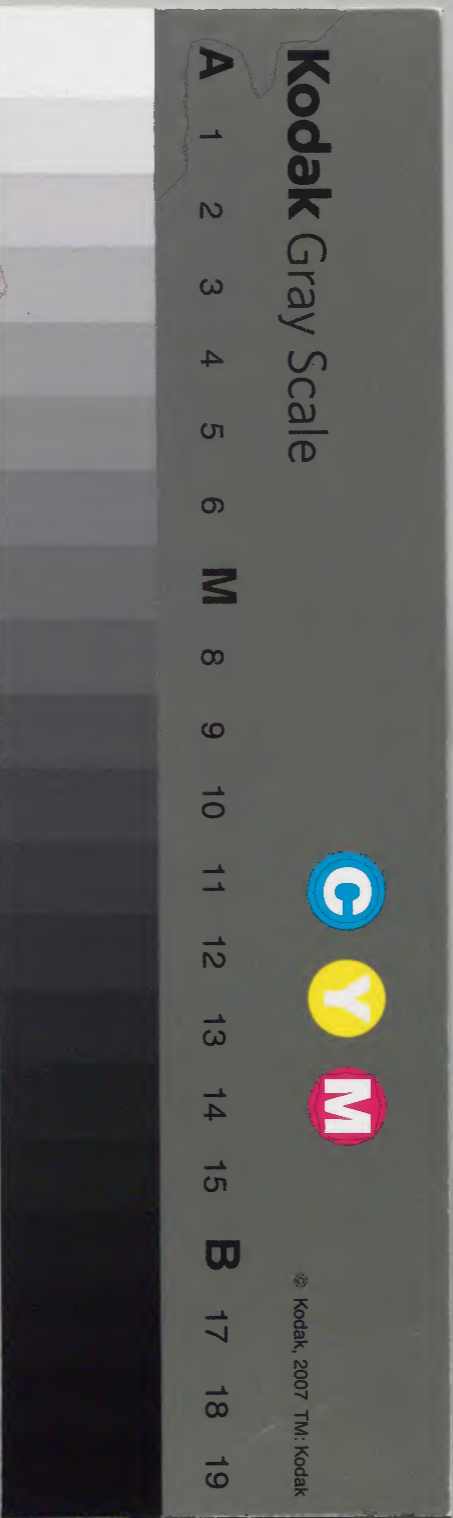
農務省
和圖印
第八八六號
共三冊

大政官文庫
和書門
二〇七六號
函架三冊

內閣文庫
和書類
二〇七六號
函架三冊

內閣文庫	
番號	和 11076
冊數	3 (3)
函號	174 197

風土



信濃地名考下編

久米路乃橋

吉澤 好謙輯

五九一九番

明治十三年購求

信濃海野
矢嶋文庫

拾遺

埋もるもの多しむらびとひとひとをわたりて橋なりとゆふ よしん人志す

その奇奇枕名義に久米路橋信濃能因奇枕に在之と又大和葛城同
名此説あり大和の中終る事よと志那の中多しなるによりとせ

大和國來自其岩橋ハ一言主神の造り不説畧之

拾遺

岩は一のよる乃ちさりもるぬ屋りくもひさうさの神

春宮女裁人

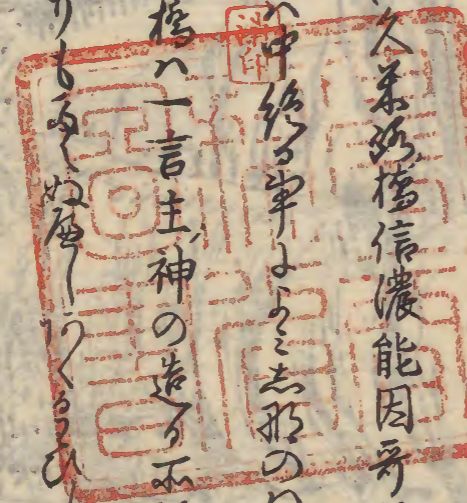
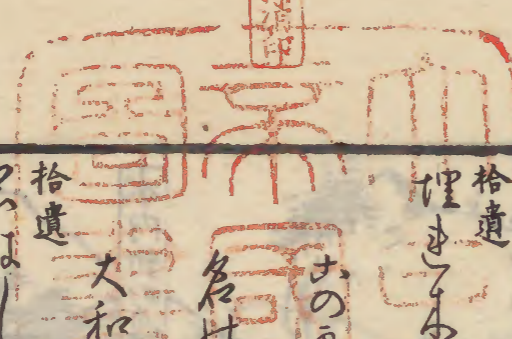
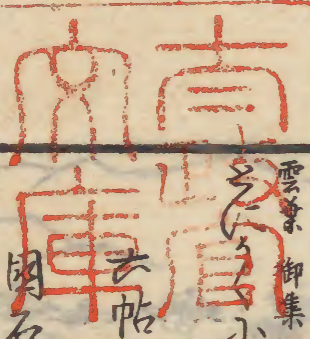
た 近

雲集 御集
云帖は清正うらふやめ此つさ橋さくよめり大和より今掛河内

後嵯峨院

大和國葛

平石村の山に石橋あり其潤可五尺長七尺許



斗部名與勢 卷之下編



水内新田道

一ツダラ岩

水内曲橋圖



犀河

不動滝

更級郡
水熊
田口道

右少缺上若架版者四兩端稍隆似欄基形勢將及南峰實天造也

更級郡八幡 土人撞木橋ととよりひうし神仙

巧よつて掛とありとつし其奇巧云紫子絶つり此地と云

のせより犀河の水多うりて流の北岨此半腹をうりて橋

卯の方より半五丈四尺とれう曲りて南へ大橋とて長さ十丈

廣二丈四尺欄基のささ二尺橋と水のあひし尋常の水まで五丈

余よつる碧潭盤渦るふに肝すさう巧匠相つてて七とせよ

改造るふり按しゆふちられ橋をうへ地理は據にあり水

て小村も熊の渡の借字隈と久米の同 倭名鈔大和国檜前和名

比乃久米又ヒノミヒノサキヒ 此地い

日本紀矩磨塗万葉 路乃久麻尾と云

いふと路のまへ乃

雄畧紀來目河は修の 來目久米通用あり

●日本紀推古天皇二十年自百濟國有化來者其面身皆斑白若有白

癩 中畧 仍令構須彌山形及吳橋於南殿時人号其人曰路子工亦名芝

耆磨云 野史曰推古帝二十年百濟國歸化人有白癩 如紀文 又巧掛

長橋今造遺諸國三河國八脛長橋水内曲橋木襲梯遠江國濱名橋會津

關川橋堯岩猿橋等其外一百八十橋云 ありの夜出處詳ありすと

りとも此橋れりめ多く人の多くと見えへはうのみちこれたくふと

や造りとりあんとおほ也

高御倉山 名所集往々 信濃とす

長秋詠草 俊 成

牛野名異

史本集云高御倉山 近江 大嘗會御屏風已日退出音聲皇太后宮俊成

卿うこたむささゆらう山形むさしりともく又常花物語卷十長和

元年の冬 六十七代 三條院 大嘗會悠紀方ゆつさあさうこの郡所神不あ。春入

青なるもみうらふ山樂の碓のあさ地樂の急のあかふ山あて青聲

やす川とありて祭主輔親のあさ首あさあま高御倉山を江あさあま

くめうらうま高御座ともて山を稱さふ事故はうと今或戸隠山

是ありうらうらうこれ況あれいあま此す

附 戸隠山奥院手力雄命中院思兼命宝光院表春命とい坊舎九五十三院 奥院

十二坊中院廿四 坊宝光院十七坊 別當天台勸修院兩界山顯光寺領千石 東鑑顯光寺天台山末云拾

佛遊行所云 九頭龍窟地主神九頭龍權現每夜米三升炊之並以梨子為神供

影宜作顯

云 中院比丘尼石より女人禁の太平記越中 村上帝康保の比まや戸隠山杖長竹

奉せまのいり信言結誦法華經後積薪自焚失矣と元亨釈書まて

より按戸隠山の巉然屹立として東に秀川越中の列岳西に争ひ

とむえ北に妙高山あり中に安曇郡を帯てうらうに眺む山布と

ふ基石のあし山深し人跡まよふ妖賊もてありて民の

害とすうらう事あれうりせよ云源満仲戸隠山の鬼神を平け其徳因

中川の山賊と討と 源満仲為信濃守年代可追考村上田融花山三代奉仕轉任國

川ありと 云○美乃の中川按神名式惠奈郡中川神社其地乎或今の中川 又云平維茂戸隠山の鬼を斬と

五將軍と稱す按田融院御宇天延年中為信濃守 又云源頼義戸隠山の鬼を斬ふと

今越後國蒲原郡岩屋村平等寺に墳墓ありと云 守帶力後五位上鎮守府將軍世よ余

太平記まてへあり或田村丸鬼神退治云以上正説未詳 八面大王といひわづらま

中川山賊と討と

八面大王といひわづらま

に按延曆の滯陸奥の蝦夷阿黒磨之白足越の
蝦夷の魁將也と云らるるの山の名れあり

●日本紀持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神云

按水内等神ハ即戸隠神社也天平年中神帳と劫造とあり

夫木

云ふ此流也風のこもりこつせよちくちのいり神

家長朝臣

按神名式水内郡風間神社

風間村社今
八幡社

一説此等神社の中より感

を陰さふおれを風神と云ふ事とあり未詳

中巻旅方條
下巻

はまの社の社

出八雲抄
未詳

按水内郡妻科村に社あり

須波上ノニヒト
下と称

土人つまの村と多ひはあり

社と唱ふ妻科とつまのといふで居る事とあり好まの言ふ似

に按三代實錄貞觀二年二月信濃國妻科地神授從五位下同五年妻科神

授從五位上とあり神名式妻科神社即是也と云ふ妻科の妻れ地

名の傍例あり此神ハ階坂ありあるの我あり

倭名鈔筑後國上妻下妻乃
郡名あり云く妻の地名又多

一本國よも今水内よも妻山安雲よ

又社名つまのと云其社よありある職者に

ありとありとありの代の社ハ鹿木造あり角楓ありの我あり

ありとあり神代紀本國よ分三神の中に五十猛神ハ本種を萌生

屋津姫の家造の幸あり楓津姫ハ材を守ふあり角楓の我もえ

れあり又つまのありの名あり史本集に中務卿のみこれ家の奇合

按僧正公卿草ふと野中の表乃つまのありありありあり

●貞觀八年二月七日神祇官奏言信濃國水内郡三和神部兩神有忿怒可

致兵疫之灾勅國司講師至誠齋潔奉幣並轉讀金剛般若經千卷般若心

經万卷以謝神怒兼厭兵疫云

按水内郡三和村あり神部いづる詳あり或神代村是乎

倭名鈔水内郡 郷名八

芋井 伊曾井 善光寺即是 見縁起文

大田 未詳東鑑 大田庄 世無多今 芥田 千田作

尾張 半波利倍 存

大嶋 未詳或云今 属高井郡

古野 布無赤 今布野作 赤生 安如布廢 或赤沼乎

中嶋 赤加之末 方廢村存

●芋井郷善光寺天智天皇三年甲子草創と云

本堂 向南北二十九間二尺余 四號 定額山善光寺南命山無量寺 東西十七間高九丈八尺云 不捨山淨土寺北空山雲上寺

今天台大勸進淨土本願寺共四十八坊 清僧三十一坊 妻帶十五坊 領千石

●尾張部へ姓あり彦八井耳命の後と云 ●古野 郷名へ布留宿禰の姓に出る

多し一此も地名津野へ津姓内野へ宇遲郡淺野へ朝野の姓ありと云

地名の野の字へ言助あり例あり一又東鑑に載す市村庄芋川庄小河庄

按當郡竹生の色小河 或若槻作其地未詳按伊豆守源頼隆信濃國住一 國と称は是も地也 若月庄 若月と号頼隆へ源義家七男隆興守義隆子也其孫若

月押田多胡と云今 按今の甲子村のともや 弘瀬小市等の地名皆本郡あり

●野史曰推古帝十五年大仁鳥臣往東國 按大仁鳥姓鞍作司馬連等孫多須 赤子也すこれ巧の比國史より 廻其

野至科野治水内海至上毛治利根海乃割戸河瀧磐 按下總 入雁越開栗栖路 國乎

及上色路 按今越中越後境川の上にあけろ山 今按水内の北郡今形大池七八あり野

尻海南亦二十余町中辨天祠を建 天文年中よりあり 又古は須波系也海

等の地ありと古水多し半ありれり是いかりの官使商賈のいさほ今

れは多しとあるまゝのといふなり 皇者神に 是も赤約のよりあり田

為と云と云 大王者神の 是も水ものすなりと云と云

日本書紀 卷之十 下 編

ついでにふれども此二の草昧の内をさかしまり

●飯繩山 貝原氏云唯祇尼天と多しと著聞集にあり知足院殿を係りし事傳く
大校坊といふ動演の傍にふたにの法をわらせしころは中流に杭の生尾
をゆるり又を平記にゆき侍者外法
成就ふとくく敷ひをりしや 去の山の麓に何とてり入村あり按西行

の舟にそのゆのわすささひまゝ一ちけとの志よりかとのられんび

は洞子ゆきさ地名よや 或人の按よも洞子の志よりや戸を年と昔ふかむと
戸ありんふらとく退去と志よりまよりのひよせとく
と實教くふ山を仰く地めれ
かく多つけしるさやわん

●續日本紀神護景雲二年水内郡刑部知摩友干情篤苦樂共之 以下恐
關文 同郡

人倉橋部廣人出私楯六万束償百姓之負楯免其田租終身 云 按當郡大倉上倉
等と略して飯山南小倉の地名多し由疑へ去の倉橋部よゆてる名にや ●寶

龜三年正月水内郡人女婦外從五位下金刺舎人若嶋等八人賜連姓 云

按水内村の本郡草創の地名此時猶以部稱

●ついでりふか郡の地名大田吉田石村牟礼柏原村山長井温井荒城等 此
ある一今の大古間小こまへ拘都るるへ富竹止美境へ坂舎部大俣へ都保姓
今の法守へ守保の姓ありや又三才の地名なりあり三歳祝の姓なり 三歳祝天物
主五世孫意

富太多根 今此越へ古志竹生へ高生藤原へ城智となくへ 鬼無里へ著楯
子命後

里の刑の勢ひまは梓葉かへ平の果るるへ 志垣へ石かこの後 志垣鬼を里りぬら
りの高よりいふ

高井乃山

そのゆにゆきさるるし志のゆきや井此の雪乃よゆめは 衣笠内大長

按さ井那よる井那村あり當郡開闢の地名に後よ郡の名よおより

●井那名地考 卷之十一 下編

●

●

●

●

●

●

●

●

●

高井の神高井の例あり

按井上の地名もかの井のたぐいの名も非

據て按よる井上の牙寄名所

高井の神跡高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

おるはうがてふなり一又佐久郡蘆田は蘇神神の里と云とて齋イハヒする

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

犬養乃御湯

名寄信のハヤ抄信の記

拾遺物名

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

温泉の世出

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

犬養乃山

名所集信儀

夫木

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

前申納言後芝御

高井の神高井の井の山深きとありんこと其地と云ひて

按九十二代後伏見院大嘗會

附 佐野

非名所

西行上人撰集抄曰永曆のす信は月のはちねのす佐野のすりささゆりしは花
あはれありしらく虫のすりくすりて行さくくゆて時をよこしに
ゆらに海をりてはれりし道の外とて草がむゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
てこれすすゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

とてりしと云

按る井於田中此湯のあは佐野ありは後よりの二僧の養あり又安曇郡大町の小佐野にも二僧の養あり其地りれり云々

倭名鈔高井郡 郷名五

穂科 保之素

小内 半守素

稻向 以素無木

日野 比無乃

神戸 村存

●穂科の穂の高は我々保神皇名ハ借字之此地ハ姓ハ同ハ不ト見也其の

霊湯ふとありりとのく永徳文治三年二月二品遊于三浦介義澄亭聽

郎曲時保神宿遊女長為前在倭倉今日召彼遊君有容貌且絶舞踏詠

哥ニシ

●小内郡 其地未詳或小内ふと訓題と加りりありのありは後更級小内

の條よりいへり其地勢山の畝のふれり不ふへり内ハ昔の借字あり

小畝の或と見えたり或今の東江部西江部のさびやうりり●稲向

即今按米持村米子村あり 碓黄 東鑑ハ米用ハ此のありむきのまの通ふり

●日野 廢 按今の月能村あり一といひハ烽火を置

れる地名ありへは按日本紀孝徳天皇三年造淳足柵置柵戸 越後郡名 同四

年治磐舟柵以備蝦夷 遂選越与信濃之民始置柵戸云 又齊明紀ハ北越の

蝦夷云ハ陸奥の蝦夷柵養津刈等の蝦夷と見えたり 蝦夷ハ固名ありハ

續日本紀文武帝大寶二年十二月令越後國修理石船柵云 元明紀ハ白和銅

二年三月陸奥越後二國蝦夷野心難馴屢害良民於是遣使徵發遠江駿河甲

斐信濃上野越前越中等國以左大弁正四位下巨勢朝臣磨爲陸奥鎮東將軍

民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯為征越後蝦夷將軍內藏頭從五位下紀朝

臣諸人為副將軍出自兩道征伐云同七月令諸國運送兵器於出羽柵又

令越前越中越後佐渡四國船三百艘送于征狄所其餘征蝦夷事畧之於

越後之津邊一て常備ありと云●神戸郷ハ其處の神封の地也

ト古菅ハ神樂ヲ天神古菅ト云々ヨスゲムラト云々名ありト●井上其本

郡の氏族之孫信之男乙兼之郎の滿實信濃ノ任ト云井上ト号ス

孫時田桑洞小坂住田又兼持芦田高梨須田佐久間安本田等あり●高

井郡温泉七野沢 田中 波湯 角間湯 河原湯 仙仁湯 山田湯

●按夜間瀬ハ大瀬ノ屬也ヤマセト云々あり方言ト云々ト云ハ故ト

イハ小谷ト平宇赤ト訓モハ海子ト三代實錄曰貞觀二年信濃國正六位上

馬背神授從五位下云同七年馬背神進從四位下同九年馬背神進從三位ト

又ト云々ト位階のすゝめハ神の官社ト云々ト云ハ今按馬背ハ

夜馬背ト云々ト云々

●式の坐原牧ハ伊奈郡あり東澄の坐原牧ハ南條 北條ト云々ト云東

條庄狩田郷ハ旧主式部太輔繁雅ト云々ト云今北條上條西條中條あり凡庄ト

云ハ中代ト云テ官家の私田ト云ハ上代ト云ハト云

●元暦元年尾藤太知宣賦信濃國中野御牧ト云々ト云中野坐原等ハ

も屬ト云々ト云牧地有ト云々ト云

●ついでト云々ト云井郡の地名墨坂越智高志野井上坂田大養笠原栲野中野狩田

等ハ姓ありト云吉村ハ善世ト云草間ハ草部仁礼ハ大仁の姓仙仁ハ千の姓ト云

一重山

かよやまうらむとのと月よこかしのけら味もゆらん 大伴家持

世は一重山信濃とん或ハミミ川奇みとえへり按万葉卷四在久通

京思留寧樂宅坂上大嬢大伴家持一隔山重成物平月夜好見云是山城相樂

郡にての奇人故夫木集山城或大和とん

蜂の母のうそに衣乃ゆへん山も紫涼——きゆのいろふ 家 隆

ゆの脚ハをもちす一重山うらむらねにみひをこせ吾背 小みんあは

按万葉の奇ハ壬二葉より河後の奇ハ万葉六より天平十五年八月十

讚久通京作哥高丘河内連とえり河内連出 續日本紀 又哥花名奇信濃郡云重

山當國雅有は名處詠之奇此處は東史とてり川奇

名考 おハみほ名のこもりよりおハハをよむる旅のちり 中勢のみこ

よかの色ハ衣くうそ一重山ねちり電ハかこむねも 小みんあは

今万葉せりて山城の一重山とまらぬ備く名考より一重山信濃とす

いへはちりん或云一隔山ハ名不よわいゆへんおハの山より万葉

重山百重山五重山は舟中ハのやへりふふとの歌ハかきあはる

●久通京ハを武帝の新都より續日本紀天平十二 年十二月 戊午 是日右大臣橘宿禰

諸兄在前而發經畧山城国相樂郡恭仁郷以擬遷都故也丁卯皇帝在前幸恭仁

宮始作京都矣太上天皇皇在後而至按獲原泉河は地より 日本紀所謂桃川是 今加茂と名伴

の五郎のよまむへの山つゝ祈りて界大和迥望似長堤いとやの山城或 大和とまらぬ 又

よりの一重山ガキキヤレロは代の山ホの山ホ若似とれを中代より此の山の

俗名ありし一 ●又按名寄り中勢御のみこの一重山の所存信濃未史と

中勢御田川の詠八伝流す史すい未史史定二首ありし所のとす

記ありしつるふしをれ 按二品中勢御八村上天皇第八皇子具平 親王六條官と号し後中書王と稱す 程存ぬし

倭名鈔埴科郡 郷名七

倉科 村存附邑地名七 東鑑九条城奥寺領

磯部 已廢 船山 方廢小 舟山存

大穴 於保素 廢未詳 屋代 也之呂 存

英多 衣太廢今阿加多庄あり 東鑑英多庄と云

坂城 佐加木 存

●磯部郷廢 按今の岩所村磯部の郡中にも 古書磯も石も同一石上の軌 是く又石岩磐皆通用

●船山郷廢て小舟山村小舟庄ふとわり系濫寛元の記に信濃五船山の内書

沿村市河高光所と云へるも此也れ ●大穴郷廢 按森村 附邑地名八 又 艾廢流失

出口村あり 地名土の字戸也 皆谷口の名 大穴此二村のうちふへし 大穴の完ハ借字なり

て山の大阪の我とも更級小谷の下のりし ●屋代郷 按三代實錄貞

親八年二月天代寺預定額云々或云社に屋代ありと古の対ハ地を拂ひ掛

場とも云々もく神と掛りて其掛場と云ニ云ふと云へし 古語云ふらと云ひしん

場を創りしと云ひしハ掛場もて官殿に代りしもの我 古語云ふらと云ひしん

神代ありの地名も又此哉 信濃國は屋代殿といふありしもの我 古語云ふらと云ひしん

りし ●英多郷廢てらるるのたのころり我神祀えこの係三信濃かへし即

い地の名ありし ●坂城郷方俗北條らるるのたのころり我神祀えこの係三信濃かへし即

坂城は坂城神社所祭神菅原公嚴之守魂天疎向津後命相殿一柱於天事代登屋代玉攝入

すししと云ひしなり ●埴科郷の地名は磯部石野オ姓ありし 清原ハ清の

姓寺尾ハ手良の姓桐堂ハ橋部ハ尾井ハ高井の姓金井ハ金姓ありし 國中

み社傳の日記に記す 菅原の口の上は柳の山魂大穴命事代王の命と云 金井

地名の例あり 素根井ハ素名の姓ふと云中條の條屋中法部を云し 拾芥

Red ink marginal notes at the top of the left page.

Red ink marginal notes at the top of the right page.

抄田籍部曰廿六町為一里註里起西此六里為條條起從北是丈大畧之條の地名也

よりの寂荷村接幕の姓は弱の姓をさしひるるへ若傳部若犬養の親くさうとほ

世弱幕の字の音よよとさるもやとかなほ按卓氏漢林弱草日本紀も又再按氣

村の地名常澄姓ありてはひの物テありテと子の通ひはあわねり然

よゆりこと唱へ春日彈正忠昌信天文中據海津城故ありてさる坂と

改言坂の地名法部ありと一字ハ字音はうさうさうさうと強くありさ高

ハ高の清者の假名あり高志ふとのあくと又香坂村は依接高と香い

く通利なまら坂隱坂の地ありとさる古史記の香坂王万葉香の

歌是く仙覺香と注してカタタ同韻相通之高聲とかの玉のハカクリと

りかると世ハ世古なる聲と叫ぶ是ハ世の便りりり

浦野乃山

浦野乃山葉十四未始也 一説云但東國のありと柿すやりのさむむとすてはうけさうくさるるを よみ人さる

浦野ハ小縣郡なり延喜の御宇浦野の記是く史本集伝はくすとのまは據

るは東鑑浦野を日吉社願とくあり同書陸田庄小泉庄常田庄海津庄依田

近代石河氏指し拾葉等あり據て信法は改はくさる

よよこの山

よよこの山まゆあかののありとあかやとあか智のうこの山よさる梅りえ 後九条内大臣

よよこの山日のありとあかやとあか智のうこの山よさる梅りえ 後九条内大臣

よよこの山未詳浦野の地名は據て暫附す一説うこの山よこの山よとこ

とよよく不記別くと疑へ按うこの山よよとさるうこの山よよとさるのうこの山よよと

今按浦野古蹟 今の岩井 遺名あり 山を隔て出浦なる也 別所院内 温泉地 南子内ひり地名あり

内邑ハ谷の惣名天文軍記信州内山城武田 信玄小諸を奪て砂原峠を越内山入即是 古語うらうらと同一浦地名野とい

ひ樹といひ一處をさるるをねるべし 再按倭名鈔更級郡名村上の地之くす銀浦野の西北村松野是平村上氏祖信濃既流の地出

浦野支流より今五明カ石のを世稱とくろ麻績 日置ふと筑前郡入村上小縣郡一属一

うらうみの山 ハ字抄信法云

其地未詳半のついでに名にあらざり ま本 後三位為實

塩田川 名寄三かの ま本未劫

名寄 ま本未劫

塩田川信の接津同名と云今按關氏接津志曰武庫山衆水會湯山至于塩 中勢親王

田曰塩田川古人所題詠蓋此乎云 云揚州河名有馬武庫三郡の水を引て塩

田と云は流す會て流し入今も舟を浮る魚一又小縣郡塩田の地流をうら シ

多川の細さ流ありの之水源を流しいり一領詠の地といひ 按寒川の地名倭名抄讚岐寒河郡を略して流をよわ

是山水よわら名あり後世或ハ高字のてり川と唱誤あり 類聚

那須乃御湯

信濃のなるすのゆともいひさるるゆと云はゆと云は ま本

按那須湯未詳今内村谷は温泉三座高梨村を對てり カク 八梨の湯湯をよ

倭名鈔備前縣梨郡伊波赤須と訓むるの歌ひうや 按梨成生楮等の字皆借字平の字の家ををすとい

ついでり高梨の地 古国府筑前より流るみさ山 北方たうまのの水と西山の

水乃高梨のよまうり筑摩の記といひのよ上世さるの湖は白竜王すめり うら流を越てたせ七里あり

料野名類聚 卷之十一 下編

料野名類聚 卷之十一 下編

料野名類聚 卷之十一 下編

料野名類聚 卷之十一 下編

料野名類聚 卷之十一 下編

料野名類聚 卷之十一 下編

とよ此記も又誣す。い地上古湖水のをどりて記する名も。又大神宮
あり傳例と按。馳龍難陀跋都陀等。翼龍也。註してい。此山が流るすの
る名。神代卷高麗。此云於。万葉卷。吾聞之於可美爾言而令落。常陸志風土
記とて曰。新治郡。馭家。大蛇多。すめり。よりて大神と名つく。又豊
後風土記にも同記あり。

●小縣郡温泉掛湯一座。靈泉寺湯一座。平井村靈泉寺。深陀堂。とのありと

るるく。正堂上梁文曰。隱岐守平朝臣。田澤湯。内湯山人。別所湯。大湯玄林。印内湯。大
繁長建。正和二年十二月。云未詳。湯二座。湯二座。

湯古我湯。院内安樂寺四層八棧の塔あり。思憐りて。ゆ。あ。い。ひ。さ。ま。物也。傳
石湯三座。て。惟。後。建。と。り。未。詳。或。北。條。武。藏。守。義。政。の。餘。澤。也。と。い。は。す。

年落。繁。信。州。に。家。居。す。世。号。注。又。野。倉。の。お。く。に。小。倉。湯。あり。温泉。凡。六
田。塚。墳。墓。別。の。よ。あり。と。云。平。重。時。三。男。建。治。三

●再按小縣地名竹志和田長背大宅佐佐為此姓あり。今秋八高長姓あり

根津八根姓。夏目田八根見。此殿戸八殿本姓。殿の地名。よ。ぶ。川。の。水。源。上。の。池。余。の。姓。

見文徳。深屋八拍保部。よ。し。下。東。国。通。懸。高。懸。大。武。白。鳥。老。も。姓。あり。と。

霊神。白鳥。化。は。か。と。り。八。同。月。此。古。交。あり。又。盛。衰。記。白。鳥。河。原。と。り。又
日本。後。紀。曰。弘。仁。二。年。五。月。信。濃。國。秋。白。鳥。三。按。白。鳥。漢。名。天。鷲。何。く。は。る。世。は。八。祥。瑞。の。分。表。

ありと。一。く。ハ。カ。の。中。に。出。る。地名。あり。●万葉卷。廿。天平。勝。宝。七。年。二。月。國。造
小。縣。郡。他。田。舎。人。大。陽。の。衣。す。を。い。ら。う。つ。さ。あ。く。あ。く。を。あ。さ。て。と。き。ぬ。也。意。

母。あり。と。り。て。と。よ。め。り。貞。觀。四。年。添。よ。梳。か。願。外。正。八。位。下。他。田。舎。人。藤。雄。授。借。
外。從。五。位。下。と。り。ハ。大。島。の。後。あり。

知俱麻河伯。名寄小縣郡とす。式の誤信は據あり
今とてハ佐久郡にたり

万十四国哥 信濃素流知具麻能河伯能左射禮思母伎彌之布美氏婆多麻等比呂波牟

式子内親王 氷のうへは降もつとも千濃河さねや峯の音もあまらむ 道遠院

千濃河、筑前郡よかひつり中代筑前の傍字よ給て 佐久郡金峰山の隈よ出りぬ

三ツ峯 又東に三峰より出る梓川ありいづのよま合ふ 小南

筑前安曇文級水内之博を經てりくま川に尾合すてちくま川といふ

越の新澤まで志家の川ともいふ

らくま河去り氷をすこにけり消ていく此峰のちりゆき 順徳院

衆を綴く甲斐守界子ありと一説あり未詳多ハテ綴有てさす所あり

似たり

扶桑略記曰 光孝 天和三年七月廿日信濃國大山類崩山河溢流 六郡城廬拂地

漂流牛馬男女流死成丘云云 仁和中の記の如く 畠記の記もちくま

川の如く一六郡よりなる川なるなり 千濃河の上川増下に盤占の社と

りあり内々高天系より廣大の系あり 大略三 神軍かとり入半を祝家の魚ん

ハ諏方の城より輕ハ伊勢は彦の神乃ををらり 地もや神代の時伊勢ハ

後田彦命のありき國ありて後ハ伊勢津彦春日部の二神國と云ふ

すなり 神武帝東征の日天日別命とて彘兵欲殺之二神畏伏し

名戸是く

國を建て春日部河内国に

今高安郡教興寺村天照大神高座神社と号即是なり

伊勢津彦大命を祀

て信濃よ去

仙覺伊勢爲土記記して神伊勢の記あり是正説なり

一説諏方明神伊勢より信濃よ

うつり申す時風伯の神よきて

風祝部説

其神ハ詔方江立云

後世おれりの説より詔方ハ伊勢津彦ありかと思説見へあり●金

山徳よ山丈あり人を呼て領の如

半平伊上云

二声三声連てよ時八松人

ありてて迎りとりよ又大人礼繁ありのあり本石よあり

して人を月送す又山姥の告とて長久定許蘇とてよ本皮をあら

つりりのりつとて按深山の老獺猴の教ありて一老浮のやまことり

より老大ありとて

いづる山

懐中抄 大本伝のまじり

あつりて方のうまきまやいづる

六帖一江いづるを

こゝろていづるの山を教われとて

いづる

昇枕名寄云いづる山の信の伊倉山正字未詳とてよ一按生藏乃姓

紀よとてより先ホ也云まありん今居倉村ありとてよと云此を詔所

平の地名山中は臨幸坂ありとてありは流人の詔ありてて傳あり神

龜元年詔方國伊勢中流定祀所とて詔部々の城よあれと村よ

詔所の地名とては續日本紀寶龜三年二月先是從五位上掃守王男小月王賜姓

勝間田流信濃國至是復屬藉云按勝間村の王城ちくま川よをむ銀小

月王配流の地ありとてあり●故家雜記よ天德四年庚申の秋村上天皇の

皇子去日村よとてあり一宮を建て位多あり其後一條院正曆三年

勝岡の王城は後醍醐天皇... 比田井内裏 窪の棺と傳

智治して後の考を待とのし

望月御牧 馬城ハ馬飼あり

紀貫之 素性法師

源仲政 惠慶法師

定家 新古今

按文武天皇即位四年令諸國定牧地故牛馬をれより後世子まで毎月勅

使駒牽あり天皇御紫宸殿閱覽信濃貢馬と云より貞觀七年十二月制

信濃國勅使牧野馬元八月廿九日貢之今定十五日云云是より牧は月々の

名あり江家次第信乃御馬本八月十五日也而依朱雀院御國忌改用十八日云

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 塩原牧 岡屋牧 宮處牧

殖原牧 大野牧 平井互牧 笠原牧

高位牧 新治牧 大室牧 猪鹿牧

萩倉牧 塩野牧 長倉牧 望月牧

右諸牧駒者毎年九月十日國司與牧監若別當人等臨牧檢印共署其帳

信乃甲斐上野二 國任牧監武藏

別當 簡繫齒四歳已上可堪用者調良明年八月附牧監等貢上若不中貢者便充駟傳

國任 別當

牛馬名類 卷之十一 編

牛馬名類 卷之十一 編

牛馬名類 卷之十一 編

牛馬名類 卷之十一 編

牛馬名類 卷之十一 編

馬若省賣却混合正稅其貢上馬路次之國各充秣芻並牽夫遞送前所其國解者主當察付外記進大臣經奏聞分給兩寮閱定其品云

按信濃十六牧貢馬八十疋 望月廿疋 甲斐三牧貢馬六十疋 武藏四牧貢馬五十疋

足上野九牧貢馬五十疋 四ヶ國合て二百七十疋 年貢の御馬とす又所貢

繫飼のる牛ありを以て後河お換武藏上総下総常陸上野下野周防長

門伊豫淡路十二ヶ國とて之より ●牧地今按山麻堀系屋宮不笠原後

方郡あり 宮處笠原今 大郡牧伊奈郡あり 平出殖系流十郡あり 一宮位

大室六ヶ井頭あり 包月長倉垣野新治備麻荻倉六牧 佐久郡あり 一

●貢牛貢蘇あり 伊奈子牛牧大室子牛崎佐久郡牛六ふとの地名是より出

るる

民部省 下 諸國貢蘇條曰 陶隱居本草註曰酥牛羊乳所為也酥音与蘇同 信濃國貢蘇十三壺 五口各大一升 八口各小一升 其取

得乳者肥牛月大八口瘦牛減半作蘇之渣乳大一斗煎得蘇大一升但飼秣者皆

別四把 上下畧

東鑑文治二年八月所謂左馬寮領

笠原御牧 見式 宮處 平井互 式 岡屋 式

平野 木詳 小野牧 大塩牧 塩原 式

南内 北内 大野牧 大室牧

常盤牧 高井野牧 式 笠原牧 南條 同北条

吉田牧 萩金井 新張牧 式 望月牧 式

塩河牧 菱野 長倉牧 式 塩野牧 式

桂井庄 未詳 緒鹿牧 式 多々利牧 金倉井牧

●右地名の内十四は寮式に出入り望野御牧ハなるをの西にあり上牧下牧の
 地もろ白平井五牧八洗馬塩尻より牧村にゆ小野南内小内等八流より
 大鹽原よりひて南内田内是し吉田萩令井二名流より小野小野あり
東濃
中
 此中牧ありては形ありて分牧地あり
南條
 此より東代は屬地あり
 既して相原の條より此言井新野等
 大室
 等言井部あり常盤牧 未詳 或云更級郡牧塩牧田中須牧南牧等以此と
 追可考
 式山鹿牧和名山家郷共廢東鑑より大塩牧より塩原牧
今南大塩原
塩原地名あり 共
 此諏方郡あり多々利牧安曇郡の多田井あり一塩川牧ハ小野あり一
 月新張若野塩神長倉緒麻金倉井七牧ハ佐久郡あり一
 ●望野御馬城今須加間の原と云北ハ布川山流方山より干溪河東北より

西よかくま川あり上原中系下系なる多々利等々の地名あり牧布能の由は約形
 の神祠干溪河を隔て小系原系は約形神祠建在月牧封境あり一
按耳取
地名共
 同より牧は出さる
 ●新治牧は系ハ一城戸二の城戸等の地名牧屋あり
ホシヤ
牧監ふとい
分治あり
 ●菱沼牧地は水あり水の塔といふ言根より産る水はとる菱沼水
ヒシヤ
 一旧地諸村の上よりとるといふ一
 ●塩地牧柵は師は陳等の地名ハ一
 一約形の地名遺れり●長倉牧今の岩地村に在り也あり一約形神祠移
 けあり一と云
此地名永正中
菱原より
 ●緒鹿牧 按式猪麻牧
作の信守の誤 今の恩川村に
上野甘樂郡
惣名西牧 在里ひり一森平をよ約形の視あり●萩倉牧ハ今の
 菅倉あり一萩倉より一の川ありと又東鑑金倉井より作の金倉と
 ありと云
按吉野紀恩金命自注
日訓金六加屋屋 今按倭名鈔日爾雅集注云萩音秋和名波木今按

牧名用菽字菽倉是也云云あれ忍八保氏傳寫の誤とつごり入るべし
今れ菅倉の地ありとて正しとす
按菅諸麻金倉法久郡に屬す約形
神祠約之村より約の入城戸平約
多々良とさふて入地ありとて以上三牧の約菴の地ありとす

凡牧地は約場
按牧地はめちやうとてり入地名は
馬部丁あり馬部給丁あり
馬部給丁あり

牧村約地は約場の地名又約形神祠今あり
按盛衰記は約吉祥は作らるる方言人の姓をい中一ひあたるは馬部丁
とてり入るる中より出るる一は百官のうちありは馬部は中を奴隷也

軍記に信濃小駒度某とて伊未の約場也元暦の軍記能登守此所務不之信乃信乃

浅間嶽

浅間嶽

古今 浅間嶽の山ありて人々のあつてとてあり ふうた

後撰 信濃の山ありて人々のあつてとてあり ふうた

拾遺 浅間嶽の山ありて人々のあつてとてあり ふうた

金葉

新古今

浅間嶽の山ありて人々のあつてとてあり ふうた

天武紀曰白鳳十四年三月信濃國灰降草木枯云今按あれ忍八保の

の美とつけらるる一は頂の大坑はひは嶽とのり流黄の氣あり 坑廣

三百 坑中は流黄なる時地火突發一は大石ありて砂を降し 大略

て禁をやく其音教百里をすゆ故に此山を元とて四時す

まゝ費之ぬの海の中船被あさまのづけ嶽のまゝ

いく千載震動を焦し山のすゝも憂るもなりとありん

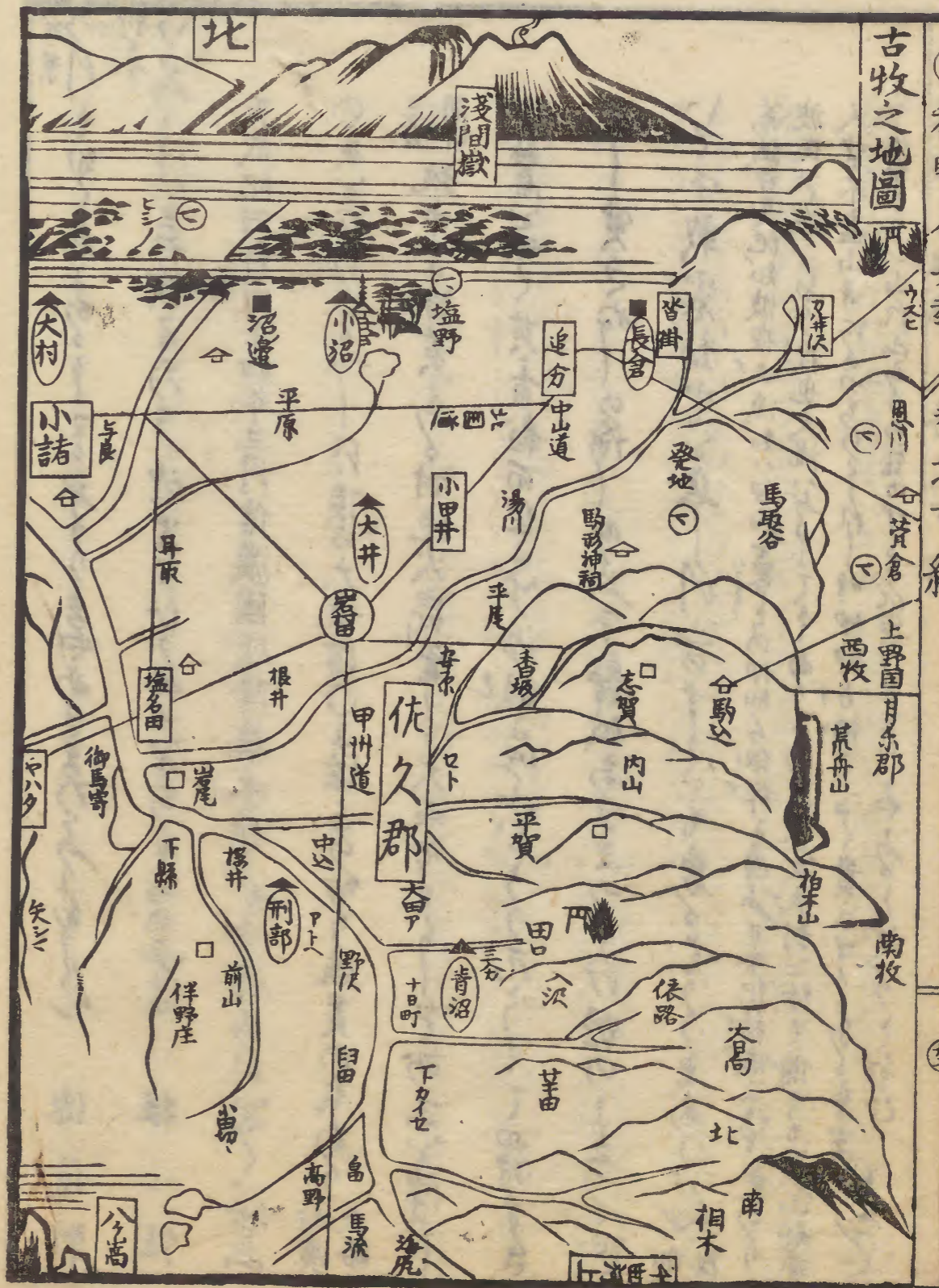
前説古史記知波夜夫流知ハ伊知を畧すの伊知ハ伊都と團ハ日本紀稜威は伊都是あり

波夜ハイ都とあり疾也夫流ハありて伊都とあり又夫利を備ともいハ山都赤

人望不盡山都ありつらとて伊都神方備て言貴さすのあり布士の

言根とていられぬのすゝも憂るもなりとありん

古牧之地圖



和甲... 卷之十一

上野国月赤郡 西牧 荒舟山

南牧

相木

高野



井野... 卷之十一

上野国月赤郡 西牧 荒舟山

南牧

相木

高野

後る多嶽八國のまふにありけく深くす沢路重有せめうれを路の
人もさむおほくす 或いはまふ六火の梵漢也 されとまきく眺 富士は遠く

のまけり明の申叔が海東諸國記よ此山に時白雪をつむとく不盡
のち根よまうくともや今某月のちまきおれとま去の後百余日霜

匠て雪のけしこれか又中秋より夜まきく或ハお子く来て毛依法
刺故 サスカレ 耕 カキ の日せむけり傳せびりハまき氣法く満登凍破りといふ

わら半割しこれハ秦の代よまき法く漢よまて暖けりと苛政ハ虎より
まけし今報有順化よあま年 ロニイ のまきもこれよまきく

淺間の山陽黄は流し水あり光を濁川といふ水係血他と云又應石をせり流くして水と吸
ふ又此山上より松をせり老樹五尺よみくハ壯觀也若水翁曰衡歡志云繁葉如刺植霜後
盡脫故名落葉松落葉松春生葉七刺或五刺如括成細小而軟淡綠色可愛信州駿州有之故
俗名富士松京師移種之呼曰姫子松多難長云云今後乃山の廣松もれのかく里より植て云

五まけりて松 若 五葉松より松毯長五六寸にり其實饒貝原氏まけり 孝朝鮮
につくまき ● 淺間山陽生紫草為佳品

附 立科山 非名處

佐久那蓼科ハ之のあけりよよこたよりて 諏方 登る半かあく二十里

水の初まきのあられもこてさそくまきくぬまきとて山まいりつちの
なめんとしハ不を徒て 酉陽雜俎所 背向しけり毛より作をまきく

峰ありハ磐石と滑よまきく之百歩姫子といふ松のまきくつて砥法
つて雲霧のふ日映すれと夜ハまきくにして神彩まきく

まのありすまきく頂よおけり 磐石ハ尾を補まきく松ハ席とまきく

まのありまきく其中に栖ひまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく
らまきくまきく又まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく

甲賀二郎巖
穴獅子窟石

井無音川等
の地名あり

蓼科神祠

毎六月八日十五日深齋而登
神祠小諸牧野侯所建

三代實録曰陽成天皇元慶二年七月十六日信濃國正六位上蓼科神授從

五位下 云云

磐井

石間斜入六尺水數斛と盛る一椀是高山雲霧の澤
石臼は堤のふり故上旬水多し下旬水少し

蓼科山

山は楢むも八世よ呼す 鶴あり 画圖はかしの差あり 戴冠^{トサカ}之^{トサカ}下^{トサカ}尾^{トサカ}
もさうさきの雄のわらちむむふして高二尺許黒色は白斑あり 鳥鶴の如^{カラスノリ}

丹頂の肉けり 雌ありとの黄^{コハ}鳴^ハ鶴^ハふくむのうらましく白^ハ蛇^ハりの宮

穴は楢の木の洞をなむと云り

後鳥羽院御集 志^ハ山乃松のあけはけらひてやまにすめらひのまらけ

或は山おぼせ鶴ありありといひは言はれぬ一とせみあり月の末に登山
すりし跡は一帯をぬして五十餘丁を登るは日暮ありてふ人等
さうらのもも六七そくありはしくそまよ相えはれくさく鶴さうん
中とらりて板家東西よまここれまをさし一杖をぬして遊み
さうりまあけくしてまもさうり三つひ押えく跡は石中へ逃入
る雛一とほりり鴨雄石間よりうてむかを呼其声虫の鳴り如し
幽栖のま人は鶴てまをぬさん鶴鳴はま流あり
丹頂いすい
そのま
●又山は美歎あり装束雷雨の勢の時小歎石^{イホ}穂^ホよりくこれおてま入
る半^ハ花^ハの如し一須臾は雨を魚を傾ふしとりみりさうき^ハの山^ハあり

雛大如鴨^{キヌ子}脚言寺許
色は鶴れか一目上るる

死して後いつる小訖ニつあり大さ小大の如くはく灰色之致長くくち
半尾一尾ハ狐の如くあすきた利尻島ツメの如く一按露霽の地樹木
凡の根あるもの毛土佐の國海を夕立起んて岩上よ小訖り鳥
鏡りてくちらめてわたりけとよく又是ありて本年六月十日
暴雨は農丈二人脚外を迎りてに電光一発いづら耳ゆらぬ
き二人の首はあつたのりりさたある背は痛つさ肩を痛て勝らん
とすさ泣める種者ら一とわたりてこの訖と大地はねつけ押して
ゆりり村人雷をそくありとさして見るもの市た如く其訖の状
ちよりのにがもあつたを江國かこの村にさすくく人
のわたりし是さすにうたさる半にあつた
明和七年閏七月伊奈郡駄科
雷訖とあつた状の如く

蕎麥生
ツハムキノ
ノロムキ

元正紀養老六年七月宜令天下國司勸課百姓種樹晚禾蕎麥及大小麥藏置儲
積以備年荒云或續日本後紀仁明帝承和録と
引て本朝蕎麥の作とす兼あり

今佐久郡河上を佳春とん又蕎麥原の地名おくよちあれ蕎麥金よ
ちり

●著聞集云道命河開梨流り一りうさうにやまどの物とらさう
多をえてあはれ何ものそと回れかこよあつてゆとほむさ
是ありとらさうさうさうさう

切てらえてらうさうさうさうさうさう
按よどまことゆとゆり一うく一今も毎郡山中の人蕎麥一本を

統係ニツとして腰向は分り

●重てりし佐久那の地名 牟漏平原守山竹田清川生藏等八姓の所 諸

牟漏のり牟礼牟婁村室より皆通用岩村田石村より 磐石岩通用 大

和園十市郡磐余同訓あり 古史記伊波礼と書村の 繼體紀より都奴安播符以數例

能伊開能云 万葉卷三角障經石村毛不過泊瀬山云 是ハ薩這石の半にて

岩のりり云 角網岩相通てつを付かともつをと 伴野 或伴或トモ 友野作 大伴

あり 野の語の助ふて地名の例多し 磯原砂原和天皇御講と 鳴やありしの大井より

方よりこととの里とつとひとのに依りしとも深倉の代より名ありし 建造 年中

元祖一遍上人 大伴と書て踊躍の念佛と弘む 田口の地名按推古天皇御代武内宿禰

野は金屋寺ハ即初園の地号 紫雲道場 後蝙蝠臣家大和國田口村仍號田口臣とて始として法園は田口村なり

阿刀部跡見部の畧也ハハ天子の御狩ハ鷹鳥飼部大飼部射部跡見部

山守部野守部より周禮よりあり迹人迹之言跡知禽獸處とつと

○本間ハ 嘸間也 爾雅注曰後嘸様 神武天皇登腋上嘸間丘迴望國狀云

今大和國本間村是也 ○與良又依の地名同訓あり 以上地名 万葉十四 各姓あり

へのまけがら云 梓弓よりとつと河と薩良の地名よかけたり 今系良の法連村の上 佐保山西北ヨラノ岑ト云

又依路の地名諸郡よりありしれ坂上之踏本にありしハ攀よづの義あり也

○大井 小田井根井 漢小市井とハ和より井堰と云義ありしハ山下回乃田井ハ

比田井の類多 比田井ハ上野より河ありしハ川ありしハ 〇塩名田

ハ塩地 傍例と按ハ塩ハ水漬也名田ハ稻也灘の義よりハ武烈紀の身ハ

名皆同 之哀世能儺鳴理鳴弥梨磨云 〇糠地名ぬハ借字 額正字ハ 禮

和野名身 卷之十四 終

安曇郡宇邊山高野波多等皆姓也○明樂廢寺清和天皇貞觀

八年佐久郡妙樂寺預定額按定額寺各賜百丁○田樂鋪新海神輿神幸地志賀

村あり今其支廢せり田樂ハ一ト大ニ世ニ行ルニ善為康朝野群載

大江匡房洛陽田樂記等ニ入リ又北条高時田樂ト母ハ近時人其傳

ト多ク今唯シテ小久慈郡金山神幸ト大系田樂トナリ○

小田井系ハ皓月輪等ノ約トシ結縷草ハ月ノ輪形ナリ經十五間許月輪形太天余四時草不長

俗説あり今ハ是土地ノ異氣トシテ也

○松原村神祠諏方上下宮賜御米卅三十石大湖ニ境內最舊ナリ軍記云後一條院長元

四年令甲斐守賴信征平忠常陣中松原大彌太治定同小跡ト定時者

ナリ姓氏不知何人○平賀新羅義光三男平賀冠者盛義多ト住其子孫信ハ

平治元年我朝戰破れ我國ニ走平士追之急ナリ於三條川原我信一騎

返合テ強敵ト拒ク世ニ鞭差ノ高名ト稱ル又治承四年宮令ナリ

文治元年義信任武藏守後裔平賀三郎建武ノ役ト武名ナリ又永正

大永ノ間平賀成頼入道等出て武勇近國トナリ○蘆田ヨシエチ米持氏武

衛御家人帳其光源賴信三男乙葉賴季此子滿實當國高井郡ト住

井上ト号シ滿實三男米持立郎家光ノ孫米持次郎光遠也ト芦田

ト号シ代々據于此●小室ハ左郎光兼任住居以次實光次ト左衛門尉師

光東澄トスル光兼姓氏未詳一記小室海野望月三人爲兄弟●望月ハ滋野氏代々住居トシ

根井行親滋野氏見于盛衰記其子権親忠八鳥行忠落合兼行等皆本郡ト出

前山小笠原長清六男伴野時長ト代々住居其孫長泰父子舍弟共五人於

鎌倉被誅城陸奥守依逆心也後康永中伴野出羽守長房より相渡り●大

井右郎朝光長清七男大戴司の家跡代任于此嫡子光長松原社頭鐘鑄曰仇久郡大井庄落合村新善光寺寛元三年

七月大檀那源朝臣光長即是行光光長三男行時行光二男其子甲斐守光榮大井惣領職と号●大室

時光住光長嫡子子孫相續以大井光長七子より二男恭光長吉呂住後領内三男

行光家督四男行氏耳取任以五男宗光森山任配流佐渡六郎光盛平原住

次僧光信●相木八依田氏代ノ據于此戰國ノ最初仇久四統と稱す所謂大井

米持伴野阿江本是也一記云延徳元年甲斐敵將仇久郡乱六月五日焼討

岩尾城世云時城主大井彈正代而立實武田彈正者也或先主入道漂泊而卒高野山藏記大井彈正忠行滿又彈正道長吉呂大永五酉三月より是乎

同時落合慈壽寺火燒傳云茲年甲州勢掠取鐘去今松原社頭鐘即是也同日敵渡倉瀬直責菅田為

棟梁大井伊賀守迎戰大破甲兵此日菅田討死云一主殿作一倉見云城米持庄司作

租稅 延喜式載信濃國正稅公廨各稻二十五萬束國分寺料四万束東福寺料四

万束文殊會料一千束修理池溝料三万束救急料八万束俘囚料三千束凡八十九万束○拾芥

抄云弘仁式云上田一段地子十束中田一段八束下田一段六束年料別納租穀一萬二千斛隨官符到充位祿

○三代實録仁和元年二月聽信濃國以乘田三十町當國厨佃但其地子任例進納太政官厨永以為例彼國官自此始焉貢御贄 梨子三荷納八籠籠 大棗一

荷納八籠籠 別一斗 楚割鮭一荷納九籠籠 例貢十月進之梨子三

荷如前 大棗一荷如前 例貢十一月進之三代實録曰仁和三年信濃國例貢梨子大棗吳桃子

議定例貢每年十月別貢酥十三壺諸國分為六番一番八國丑未年二番六國寅申年三番八國卯

為期立為恒例云酥牛羊乳成酪酪成酥酥成醍醐

古今物名ゆらぎのり ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん ちりめん

○古今集物名の言の例貢のものとてしるす時とて作るものとてしるす時とてしるす

王計式 貢絲 信濃為 調紺布六十端 和名 縹布三十端 和名鈔曰本朝式有廣布調布調布讀豆

上総国郡名也其體與他国調布頗別異故以所出国郡名為名 紺革五張自餘輸布 紙 紅花 麻子 芥子 猪膏

脯 和名鈔云說文云脯乾肉也禮記云牛脩鹿脯 鮭楚割 和名魚條讀須波夜利 冰頭 和名

背腸 美奈 鮭子 和名云或說云謂背為皆誤也 加茂菰 和名 萬葉卷五 美奈乃和多迦具漏伎可美雨

七彌那能綿香烏髮月十三日蟻腸香黑髮丹其二三者或六羊魚の背腸の塩の赤さ極めて

夫木集 新六帖 二百首 祈年祭料雜弓百八十張 梓弓百張 十二月以前進之年料雜物筆一百三十管 零羊

角六具 木賊二圍 樺皮二圍

まふ 新勅 古今地名 和名云玉篇云樺木皮名可以為炬者也 和名加波又加仁波櫻皮有之

○様子の半がよりの○玉子の神くさくさとして本城うらとの糸とくさくさの芳名産ありて
○和名云玉篇云樺木皮名可以為炬者也 和名加波又加仁波櫻皮有之

交易雜物 商布六千四百五十端 熟麻十斤 履牛皮三張 鹿皮九十張 洗革十五

枚 紫草二千八百斤 布一千五百端 細貫筵五十枚 圓長猪脂一斗 櫛子四合

唐式云賞布漢語鈔云佐與美乃沼能。東鑑に藤祐光佐与美の水干をのりかとりり玄
惠庭訓細美よりより其比の俗字なり今も様子をてし相あり。この地俗に女の供
よりのものよりのけむりとしててやういといひててつら此のみのいとわきう
いふものよりいといとてはよけておふかのまぬをひかるとえういといひて
美命いりる字なりやけつる絹布に類して糸はつとて今もあつし。調布は又
テウクリと訓手依のクリは物キと云手御調也。日本紀崇神天皇十二年始於人民吏科
調役此謂男之彈調女之手未調は出らる。布小乃也
万葉常陸守かみ 我雨 我雨 我雨

年料雜藥十七種 黃連十斤 細辛卅五斤 白朮廿六斤 九兩 藍漆五斤 大黃三十斤 女
菁六斤 蔘茹卅七斤 干地黄一斗 四件 附子三斗 蜀椒一斗 六件 燕夷一斗 石流黃

三斗八升

今高井郡米子山産為最上

熊膽九具

今諸郡出水内山中尤多或云信濃熊膽氣味功能會津越前不劣唯涅色而黑漆の如く一種ありのり

鹿茸十具枸杞廿斤杏仁六斗大棗大一斛

按今産藥數十種ありこれと典藥式乃附子の如き不審すくあり或は元天朝

盛めり一時中華より藥物熟識のものと召来し法を巡視せり方物を貢進せり延喜式貢藥を見つるは時産人葦處九州杉伊勢甲斐陸奥若狭越前丹波美作伊豫志摩等あり今や滋者ありと有り

倭名類聚鈔曰田三万九百八町八段百四十步正公各三十五萬束本稻八千九百

五十束雜稻十九万五千束 見稻簿曰米六十壹万五千八百十八石七斗三升

七合五勺

按孝德天皇四年詔りて田段毎に稻稻二束二把中畧田之調絹絶絲綿並隨卿土所出田一町二絹二丈絶二丈布一丈別叔戸別之調一戸貫布一丈二尺以五十戸元仕丁一人之粮一戸庸布一丈二尺庸米五斗上上畧本朝ふり調くは庸と云れぬ或云按唐制有田則有租有租有家別有調有身則有庸租出穀庸出絹調出繒績布麻云

信濃地名考 大尾

下卷補遺

●戸隠山の西南鬼キナサ五里村あり土倉村等あり山を越て戸隠と云ふなり是娘の

又虫城後にはある間道あり五里の中敷の村の城と世に戸隠と云ふ浦との邊あり此の

●戸隠の南は大塔といふ地あり今又道大塔記といふは悪承七の小山笠原長秀の

小嶋井川館政長孫長基子世に之義一統の作者と云 信濃守にて下向の地は伊奈郡より佐久郡に入り

若光寺にあり町に國人と不岐の事ありて同九月文級郡郡治の

要害と楠籠て合戦あり及小伊奈一郡味方として一日四度の戦ひあり

長秀死すに討負水内郡大塔の要害より逃入志を兵糧尽して

上下の飢渴甚余日に及長秀の子の勇士三百余人悉討盡之に時佐久

郡耳取の主大井治部少輔光範和議を以て將軍教ひ加へ長秀の舎

弟政康と濃州土佐より呼出して惣攝と爲りて上方より退去す云

良親王よしの 親王嵯峨天皇第二御子也 ●系書云大江廣元嘉祿元年に卒
其子親廣其子佐房其子上田太郎伏泰舍弟上田弥次郎長廣等弘安年中人
其子孫各上田に住ハ ●國分寺講讀師諸國分寺金光明寺モク 文六佛と建
各造七重塔二區寫金字金光明經一部講師と置て一國僧尼の司とハ
延曆寺並諸大寺三綱任之三綱上座寺 主都維那 寄領四千町續日本紀よハ あり
玄蕃式云凡延曆寺三綱一任之後任諸國講讀師其上座寺主任
講師都維那任讀師ニ

●佐久郡岩村田條 日本紀神武帝磐余イハレの地名癩て先儒考と流ハ 今按
磐余若櫻宮古跡大和國十市郡池内村池内所謂 市師地是 其北石原田是即磐
余玉穗宮の跡也石村通イハレ 石原とあり石村も通イハレ 石村イハレ あり

助タス 後世例多 ●安原村源家宗安原寺 永亨年中足利成氏

生長の地管領記ハ 任持ハ智鑑禪師の弟子大井御前守杖光の子後改 持光
永壽王の母と兄弟と女養寺領三百貫文佛堂百二十三 未山貳百之十余と云今廢セリ

●貢御贄條 江家次第東宮御元服條下召菓子鮮物國ハ 信濃國貢之
●主計式貢絲 續紀親光元年五月令上総信濃二國始貢絶調フトキヌ ●贄布

江次第始て細美ハ 仰ハ ●高布和名 多途 曰唐式白絲布チツクリノネ 俗用半仰布三字と
あハ 多ハ 少ハ 布ハ ●搦子四合 倭名鈔曰唐韻云搦音字雷 同字亦

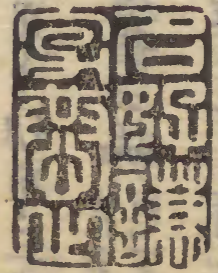
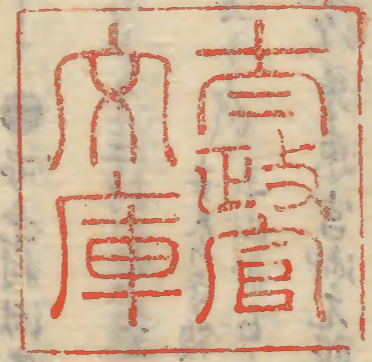
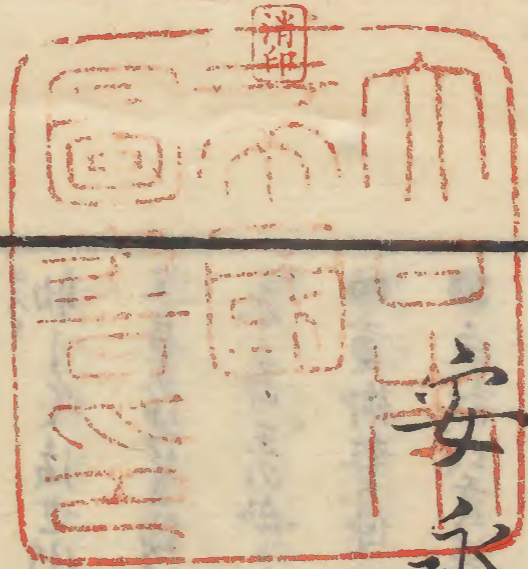
本朝式云搦子酒器也ハ 江次第二子孟旬儀厨御贄の注ハ 持御贄
四棒入搦子ハ 又内堅三人各持搦子有蓋とハ

和野名集

信州岩村田

吉澤鷄山藏板

安永二年癸巳春



書肆

京都三條通升屋町

出雲寺文次郎

同寺町通松原下ル

勝村 治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同本町通横山町壹丁目

出雲寺萬次郎

同芝神明前

岡田屋嘉七

